

アジア太平洋と日本の架け橋として機能する都市になって欲しい。

—— 福岡アメリカン・センター館長 マイケル J. チャドウィック氏



マイケル J. チャドウィック

(Michael J. Chadwick)

1991年ウィリアム・アンド・メアリー大卒（国際関係学士）、1994年ジョージタウン大学外交官学修士号取得。エーシーニールセンジャパン社初代ディレクターとして活躍後、2003年に国務省入省。

シンガポール及び在モルドバ米国大使館等を経て、2010年6月末より在福岡アメリカ領事館広報担当領事兼福岡アメリカン・センター館長。

デジタル化とグローバル化が進んだ 25 年

この 25 年間、様々な社会・経済環境の変化がありました。私が特に重要な変化だと感じているのは、どちらも外来語ではありますが、「デジタル化」と「グローバル化」ではないかと思えます。

まずデジタル化です。25 年前、私はまだ高校生でしたが、その頃世の中にインターネットという概念が誕生したと思えます。大学生になって、電子メールと接する機会を得ましたが、当時はまだそれを使いこなす必要がなく、電話で済ませればいいのではないかと感じた記憶があります。コンピューターも大きく重く、手軽に皆が持つようなものではありませんでした。

それが現代では、我々は異国の人々とネットを通して会話することができ、世界の株式をオンライン上で取引することもできるようになりました。「世界が小さくなった」という表現が的確かどうかはわかりませんが、デジタル化によって人と人のつながりが作りやすくなった、と言えるのではないのでしょうか。

次にグローバル化です。25 年前、福岡でも

地元のスーパーで扱われていた品物の多くは地元の製品だったのではないのでしょうか。それが今やあらゆる国を原産地とする製品がすぐ近くのスーパーで売られており、商業だけでなくあらゆるビジネスにおいて、国際的なつながりが急増してきました。全ての国、人々や情報のつながりが進化してきて、企業も、例えば IBM 社のような国を跨ぐグローバル企業が多く出現しています。様々な分野で国の概念を超え、国境を簡単に越えられる世界になってきたと言えるのではないのでしょうか。

アイデンティティが重要になる 25 年

これからの 25 年を見通したとき、私はエネルギー問題の解決いかんによって、時代変化のシナリオが大きく分かれるのではないかと思います。

例えば原子力を脱却しつつソーラーエネルギーなどへの転換が進むことによって、エネルギー問題が解決されるのであれば、活発な経済活動は持続され、これまでよりさらにデジタル化とグローバル化が進行し、人と人のつながりがさらに深化していこうと思えます。この

デジタル化とグローバル化の一層の進行によって、将来は個人のアイデンティティが国という枠から離れていくのではないかと思います。

一方、エネルギー問題が解決できないのであれば、それが経済成長の足かせとなり、その結果国際貿易の規模が縮小したり、物流量の減少や、特定の地域型産業を再び興していかないといけない時代になるかもしれません。

前述した個々人のアイデンティティについてももう少し説明します。オンラインで個人の情報が世界中に提供される時代になっていくと、その人個人の評価が国の枠を超えて行われるようになります。そういう環境では、個々人の考え、まさにその個人のアイデンティティというのが非常に大きな意味を持つことになってくるでしょう。

都市のアイデンティティも同じで、その都市に関する情報は、恐らく将来は言語の障壁を越えて共有されたり、情報が集約したりします。その都市がデジタル世界とつながりやすいのか、コスモポリタンシティであるのかなどの基準で、住む価値のある都市なのかどうかの世界中から評価されていくのではないのでしょうか。

福岡の良さは20年変わっていない

私はJETプログラムをきっかけに、ALT(外国語指導助手)として1991年に初めて福岡に来て1年間生活しました。その当時は城南区の教員住宅に暮らし、太宰府や筑紫野の中学校で教鞭を執っていましたが、20年前に福岡で生活をして感じた福岡のあたたかさ、これは人々のあたたかさも天候のあたたかさもそうですが、今も変わっていないと思います。料理のおいしさ、生活の快適さも変わっていません。もちろん七隈線が整備されたり、天神の商業店舗が変わったり増えたりしていますが、「福岡のココロ」は変わっていないのではないかと感じます。

1年間のJETプログラムを終えて帰国した私は、その後外交官になるための勉強をしました。すぐには外交官になれませんでしたので、ビジネスマンとして東京に引越し、9年間、主に外資系企業を相手に市場調査・データ分析の業務に携わりました。市場調査の仕事は面白かったのですが、国際的・世界的に貢献することの方がより意義があると思ひまして、9.11同時多発テロをきっかけに再度外交官試験にチャレンジして、2003年に国務省に入省しました。

その後、シンガポールに2年、モルドバに2年、ワシントンに1年勤務した後、福岡に着任しました。国務省の人事配置は、基本的には各人が勤務地の希望を出して、応募者の中から選考される仕組みになっています。私が現職の福岡勤務を希望した時、このポジションに同時に応募した同僚は実に26人もいたのです。国務省職員は一般人より海外事情に詳しいですが、そういう職員の中で福岡はとても人気のある都市であると言えます。

私はバージニア州で学生時代を過ごし、今申し上げたように東京や世界の各都市に滞在した経験がありますが、それでも福岡の「楽しい住みやすさ」を感じていますし、福岡が大好きです。また、私は福岡の歴史にも興味がありまして、特に幕末から明治にかけての文明開化の時代、日本全体が過去の慣習を一気に変えていくような新時代に非常に惹かれます。そしてその時代の中心でもあった薩摩と長州を、このすぐ近くの福岡から見ることも嬉しいですね。

福岡市は今一步国際的になるべき

さて、福岡は過去から四ヶ国語の標識を進めるなど、国際化への取り組みを早い段階から進めてきました。今後はもっと色々な人種や文化を受け入れて、多様性のある、もう一步国際化

された社会を築かないといけないと思います。

これまで福岡市は「アジアのゲートウェイ」という表現で自らの都市のアイデンティティを示してきましたが、「ゲートウェイ」という言葉ですと、主に日本向けの機能を担うイメージを与えます。私は、福岡はアジアだけではなく、日本とアジア太平洋地域をつなぐ架け橋として機能するのがいいのではないかと思います。「架け橋」と言うことで、双方向につながることが意識されますし、「アジア太平洋地域」には、人口の約1割がアジア系であるアメリカも含むこととなります。

福岡市民がもっと国際的な視野を持つためには、若い人が海外で学ぶ機会があるといいでしょう。昨今日本のアメリカへの留学生が激減していると報じられていますが、在日アメリカ大使館・領事館としては、留学生や就活生を支援するプログラムを積極的に実施することで、日本の国際感覚ある優秀な人材が育つことに協力しています。

アメリカの教育システムは日本のものとは大きく異なります。クリティカル・シンキング（批評的思考）に代表されるような、あらゆる事柄に対して知的批評ができる能力が身につくよう学生を育てます。ディベートを盛んに取り入れたり、多肢選択式試験より論文試験を重視したり、先生の講義が全て正しいとはされず、学生の考えで一から議論を進めたりします。また、若いうちから自立心を育てるために、義務教育の段階から生徒自身が自分にとってふさわしい教育や自分にあったレベルのカリキュラムを選択できる仕組みになっています。このような教育によって、時代環境の変化に拘らず、国際感覚ある人材を輩出することができるのかもしれませんが。

日本の教育システムも素晴らしいところがありますので、それを無理して変える必要はないと思います。むしろ私は、今回の東日本大震

災がきっかけとなり、日本人の色々な考えが変わるのではないかと思います。例えば、長期的には原子力発電以外の電力構成にしないといけないと、今の日本人はみんなが感じるようになっていないのでしょうか。国際化や日本の将来についてもみんなが考えを持つきっかけになるのではないかと思います。

起業家にアメリカのビジネス情報を

在福岡米国領事館は、九州と山口県、あわせて人口約1,500万人、経済規模で言うとタイや南アフリカに匹敵する地域を管轄しています。私は主にアメリカの情報をこの地域に伝えていくことを一つのミッションとしているのですが、特に九州では、起業に関するアメリカの様々な情報を提供する活動を進めています。

起業家が新しい考えを創り、それを実現するための能力を高めることに関する講演会・セミナーを、九州経済産業局と協力してこれまで11年間継続して、九州全域で実施しています。参加者は新規起業や社内での新たなプロジェクトを考えている人々などですが、例えば今年9月にはメンタリングプログラム(数千人の登録メンターを活用し、若手起業家をサポートする事業)を実施するアメリカのNPO法人の事例を長崎、福岡、久留米で紹介するなど、大変実用的なアメリカでの新規ビジネスや成功事例の共有を行っています。このような活動を通して、九州でますます起業が盛んになり、活力ある地域づくりに貢献できればと思います。

起業だけでなく、産学連携に関してもアメリカの取り組みが参考になる部分が多いと思います。研究した内容を商品化したり、大学教授が自らの会社を立ち上げたり、経営能力のある人を招聘したりする仕組みなどアメリカは進んでいますので、これから九州の大学や地域にも知ってもらうきっかけを作っていけたらと思います。 インタビュー日:2011/7/19 文責:URC 天野